

## 30 開発秘話

場面：ドキュメンタリー番組

状況：商品開発時のエピソードをナレーションで紹介する

登場人物：A（男性、ナレーター）

(BGM)

A：時は、明治。日本で初めて、牛乳を入れるための瓶、牛乳瓶がつけられた。

清潔で、丈夫。だが、それは同時に重く、割れやすい容器でもあった。

配達中の事故、洗浄の手間、再利用の管理——牛乳を「安全に、清潔に」届けるには、まだ遠い道のりだった。

時は流れ、昭和の高度経済成長期。街は変わり、人々の暮らしも変わる。だが、牛乳は変わらなかった。相変わらず、ガラス瓶のまま。そのとき、ある提案が持ち込まれる。

「牛乳を、紙で包めないか？」

そんな非常識とも思える発想に、本気で挑んだ者たちがいた。彼らが目をつけたのは、海外で生まれた紙容器だった。「紙ごときで牛乳を守れるのか？」業界中から疑問の声が上がる。

技術者たちは、何千という試作を重ねた。折り目が1ミリ違えば、液体は漏れた。密封温度が1度ずれば、パックは膨らみ、中の牛乳は腐った。容器の形、注ぎ口の角度、栓の開けやすさ——すべてを一から見直し、試し、壊し、また作り直す。

転機となったのは、学校給食。「瓶より軽く、安全で、持ち運びも簡単」その利点が評価され、昭和40年代、子どもたちの前に紙パック牛乳が並ぶようになった。ある朝、校庭で子どもたちが紙パックを手に見つめていた。

その光景を見た技術者たちは、静かに涙を流した。

そして、紙パックは全国へと広がる。いま、牛乳の8割以上が紙容器で届けられている。

だが、それはただのパッケージではない。見名もなき挑戦者たちの努力の結晶なのである。